

# 日の出

国木田独歩

青空文庫



某なにが法は學が士くし洋行やうかうの送別會そうべつくわいが芝山内しばさんないの紅葉館こうえふくわんに開かれ、會の散じたのは夜の八時頃じごうでもあらうか。其崩そのくづれが七八名めい、京橋區きやうばしき彌左衛門町やざゑもんぢやうの同好俱樂部どうかうくらぶに落合おちあつたことがある。

小介川文學士こすけがはぶんがくしが伴ともなふて来た一人の男を除いては皆みな此俱樂部このくらぶの會員くわいみんで、其の一人ひとりはオックスホード大學だいがくの出身しゆつしん、其一人はハーバード大學だいがくの出身しゆつしんなど、皆みなそれ／＼の肩書かたがきを持って居る年少氣鋭ねんせうきえい、前途有望ぜんとういうぼうといふ連中れんぢゆうばかり。卓たくを圍んでかこんで吐はき出す氣焰きえんの猛烈まうれつなるは言いふまでもないことで、政論せいろんあり、人物評じんぶつひやうあり、經濟策けいざいさくあり、時に神學しんがくの議論ぎろんまで現あらはれて一しきりはシガアの煙けむを々々濛ぼう々ぼう々ぼうたる中なかに六七ろくぢの人間じんめんが隱見いんけん出沒しゆつぽつして、甲走かんぱしつた肉聲にくせいの幾種いくしゆが一高いつかういつてい、一低いってい、縱横じゆうわうに入り亂みだれ、これに伴ともなふ音樂おんがくはドスンと卓たくを打うつ音おと、ゴト／＼と床ゆかを蹴ける音おと、そして折り／＼冬ふゆの街まちを吹ふき荒あらす北風きたかぜの窓まどガラスを掠かすめる響ひびきである。時々とき／＼ボーイ使童しゆうにふが出入しゆつにふして淡泊たんぱくの食品くひもの、勁烈けいれつの飲料いんれうを持運もちほこんで居あた。ストーブは熾さかん燃もえて居ある――

『貴殿あなたは何處どこの御出身ごしゆつしんですか』と突然とつぜん高等商業かうとうしやうげふ出身しゆつしんの某なにがし、今は或會社あるくわいしやに

出て重役の覺目出度き一人の男が小介川文學士の隣に坐つて居る新來の客に問ひかけた。勝手な氣焰もやゝ吐き疲ぶれた頃で、蓋し話頭を轉じて少し舌の爛れを癒さうといふ積りらしい。人々も同意と見えて一時に口を閉たけれど、其中の二三人は別に此間に氣を止めず、ソファに身を埋めてダラリと手を兩脇に垂れ、天井を眺めて眼を細くして居る者もあれば、シガーをパク／＼ふかして居る者もある。一人は毒瓦斯を抜くべく起つて窓を少し開けた。餘の人々は新來の客に目を注いだ。

『僕ですか、僕は』と言ひ澀んだ男は年の頃二十七八、面長な顔は淺黒く、鼻下に濃き八字髭あり、人々の洋服なるに引違へて羽織袴といふ衣装、今は都下で最も有力なる某新聞の經濟部主任記者たり、次の總選舉には某黨より推れて議員候補者たるべき人物、兒玉進五とて小介川文學士は既に人々に紹介したのである。

兒玉は先程來、多く口を開かず、微笑して人々の氣焰を聴て居たが、今突然出ゆつしんの學校を問はれたので、一寸口を開き得なかつたのである。

『僕の出た學校をお尋ねになるのですか。』と兒玉は語を續うとして、更に斯う問ふた。『さうです。君の出られた學校です。三田ですか、早稻田ですか。』と高等商業の

紳士は此二者を出じといふ面持で問ふた。

『違ひます』と兒玉は微笑した。

『オオさうですか。何處です。』

『大島學校です。』

『大島學校？ 聞たことのない學校ですな、お國の學校ですか。』

『さうです、故郷の小學校です、私立小學校です』と言つた時の兒玉の顔は眞面目であ

つたけれど、人々々々は笑ひ出した。

『戲談を言つては困ります。だから新聞記者は人が悪い。人が眞面目で聞くのに。』

と高商紳士は短くなつたシガーをストーブに投げ込んだ。

『僕も眞面目で答へたのです。全く僕は、大島小學校の出身です。故意と奇妙な答

をして諸君を驚かす積は決して持ないので。これまでも僕は出身の學校を聞れま

したが。初から答へない時もあり、答へる時は何時此の答をするのです。』

『さうすると貴殿は小學校以外の教育はお受にならんかつたのですか。と申すと失

敬ですが其以外の學校にはお入にならなかつたのですか』とソファに掛けて居たオ

ックスフオード出身の紳士が身を起して聞いた。其口元には何となく嘲笑の色を

うか  
浮べて居る。

『さうです、僕はオックスフォードにもハーバードにも帝國大學にも早稲田にも三田にも高等商業學校にも居たことは無いのです。たゞ故郷の大島小學校を出たばかりです。斯う申すと、諸君は妙にお取になるかも知れませんが、僕はこれでも窃かにおほしませうがくかう大島小學校出身といふことを誇つて居るのです。又た心から感謝して居るのでございませう。僕は不幸にして外國に留學することも出来ず、大學に入ることも出来ず、ですから僕の教育、所謂教育なるものは不完全なものでしよう。けれども尚ほ僕は、大島小學校の出身なることを、諸君の如き立派な肩書を

持つて居らるる中で公言して少も恥ず、寧ろ誇つて吹聴したくなるのです。問はれなければ黙つて居ます。問はれても言ふて益なき仲間に向つては黙つて居ます。けれども諸君の如き教育高き紳士に問はれては實に眞面目に僕は、大島小學校の出身といふことを公言するのです。

早稲田を出たものは早稲田を愛し、大學を出たものは大學を愛するのは當然で、諸君も必ず其出身の學校を愛し且つ誇らるゝでしよう。其如く僕は故郷の大島小學校を愛し且つ其出身たることを誇るのです。』

『そうです、僕も故郷の小學校を愛します。』と言つたのはハーバード出身の紳士。『そして誇りますか。そして其出身たることを感謝しますか』と問ひ返へした兒玉の口調はやゝ激して居た。

『さうです。』

『何故ですか』と問ふた兒玉の眼は輝いた。

『イヤさう眞面目に問はれては困る。僕は小兒の時を回想して當時の學校を懐しく思ふだけの意味で言つたのです』とハーバードは罪のない微笑を浮べて言譯した。

『解りました。それだけの意味なら解りました。けれども貴殿がさういふことを申されるのも要之、僕が一の小さな小學校の出身であることを誇るとか、感謝するとか言ふのは、矯激の言を弄して自ら欺むき又自ら快とする者のやうに取つて居らるゝからだらうと思ひます。しかし、僕は決してさういふ輕薄な心をもつて言ふのではないのです。若し諸君の中、僕と同じく大島小學校に居られた方が有たなら、矢張僕と同じやうな情を持れるだらうと信じます。』

大島小學校に居たものが、今東京に三人居ます。これが僕の同窓です。此三人が集まる會が僕等の同窓會です。其一人は三田を卒業して今は郵船會

社しやに出でて居ゐます。其その一人ひとりは法はふ學がく士しとなつて今いまは東とう京きやう地ち方はう裁さい判ばん所しよの判はん事じをして居ゐます。けれど彼かれ等ら二ふた人にんは僕ぼくと同おなじく大おほ島しま小せう學がく校かう出しゆつ身しんなることことを今いまでも僕ぼくと同おなじやうに誇ほこり且かつ感かん謝しやして居ゐるのです。そして僕ぼく等らは月つきに一いち度ど同どう窓さう會かいを開ひらいて一いつ夕せきを最もつも清きよく、最もつも樂たのしく語かたり且かつ遊あそぶのです。』

兒こ玉だまの言げん々くく、肺はい腑ふより出いで、其その顔かほには熱ねつ誠せいの色いろ動どういて居ゐるのを見みて、人ひと々々は流さす石がに耳みみを傾かたむけて謹きん聽ちやうするやうになつた。

オツクスホード出しゆつ身しんの紳しん士しは年ねん長ちやう者じやだけだけに分わけても兒こ玉だまの言いふ處ところに感かんじた體ていで。

『それほどに言いはれますからには、其その大おほ島しま小せう學がく校かうとやらいふ學がく校かうには何なにか特とく種しゆの事ことがあつて、貴あな殿たの心こころをそれほどまでまでに動うごかして居ゐるのだらうと思おもはれます。それをお話はなし下くださいませんか。ね、諸しよ君くん、それを聞きかして戴いただかうではないか。』

『さうとも、兒こ玉だまさん僕ぼくの言いつたことことはお氣きに觸さらんやうに願ねがひます。何どう卒ぞその大おほ島しま小せう學がく校かうのこことを話はなして貰もらひたいものです』とハーパーぜんげんは前ぜん言げんのお謝わび罪づみにオツクスホードに贊さん成せいした。

『諸しよ君くんがお聽きく下くださるなら申まうします、強しひては申まうしません。餘あまり面おも白しろい話はなしではないのですから。眞ま面め目めな事じ實じつは流りう行かうの小せう説せつとは少すこし趣おもむきを異ことにしますから』と兒こ玉だまは微び笑せうを洩も



らして『小説も面白う御座います。けれ共事實は更に面白う御座います。』  
 『是非お話を願ひたいものです』とハーバードは乘氣になつた。

『宜しう御座います、それではお話し、ましよう。』

僕の十二の時です。僕は父母に従つて暫く他國に出て居ましたが、父が官を辭すると共に、故郷に歸りまして、僕は 大島小學校といふに入りました。

海岸から三四丁離れた山の麓に立て居る此小學校は見た所決して立派なものではありません。殊に僕の入つた頃は粗末な平屋で、教室の數も四五しか無かつたのです。それで他國の立派な堂々たる小學校に居て急に其様見すばらしい學校に來た僕は子供心にも決して愉快な心地は爲なかつたのです。

けれども僕の故郷は二萬石の大名城下で、縣下では殆んど言ふに足らぬ小町、殊に海陸共に交通の便を最も缺て居ますから、純然たる片田舎で、日本全國津々浦々までも行わたつて居る筈の文明の恩澤も僕の故郷には其微光すら認め得なかつたのです。學校といふのは此大島小學校ばかり、其以外にはいはのはのいの字も學ぶ場所はなかつたので御座います。僕も初は不精々々に通つて居ました。校長の名は大島伸一、其頃僅に二十七八でしたらう。背は左まで高くはない

が、骨太の肉附の良い、丸顔の頭の大きな人で眦が長く切れ、鼻高く口緘り、柔和の中に威嚴のある容貌で、生徒は皆な能く馴れ親しんで居ました。僕が此校長の下におほしませうがくかうに居たのは二年半で、月日にすれば言ふに足らず、十二歳より十五歳まで、人の年齢にすれば腕白盛でありましたけれど、僕が眞の教育を受けたのはこのとき、僕の一生の羅針盤を置れたのは實に此時です。

僕が大島學校に上つてから四五日目で御座いました、四十を越えた位の一人の男が學校の運動場に来て、校長と頻りに何事か話して居ましたが、其周圍に七八名の生徒が立つて居て、顔を上げて二人の物語を聞いて居ました。暫くして其男は丁寧にお辭儀を爲て、校長も至極丁寧に禮をして、そして二人は別れました。

僕は子供心にも此様子を見て不審に思つたといふは、其男の衣服から風采から舉動までが、一見百姓です、純然たる水呑百姓といふ體裁です、けれども校長の之に對する様子は郡長様に對する程の丁寧なことなので、既に浮世の虚榮心に心の幾分を染められて居た僕の目には全く怪しく映つたのです。

けれども家に歸つて別に此事を父にも問はず、學校朋輩にも聞きませんでした。一月經たぬ内に自然と此不審が晴れて來ました。四十男の水呑百姓と思つた

のは、學校がくかうより十町ばかり隔へだつて居ゐる松林まつばやしの奥おくに一構ひとかまへの宅地たくちを擁ようし、米倉べいさうの三棟みつねを並ならべて居ゐる百姓ひやくしやう、池上いけがみ權藏ごんざうといふ男をとこで、大島おほしま小學校せうがくかうの創立者さうりつしや、恩人おんじん、保護者ほごしやであつたのです。それならば何故なぜ、池上いけがみ小學校せうがくかうと名稱なづかずして大島小學校おほしませうがくかうといふ校長かうちやうと同姓どうせいの名稱めいしやうを付けたか、諸君しよくんも必ず不審ふしんに思はれるでしょう。

これには又意味またいみの深い理由りゆうがあるのです。

僕ぼくが此小學校このせうがくかうに入る僅はひか四年前よねんぜんに此學校このがくかうは創立さうりつされたので、其それより更さらに十年前ぜんぜんのこと、正月しやうぐわつ元日げんじつの朝あさでした、新年しんねんの初光しよくわうは今將いまさに青海原あをこうなばらの果はてより其第一線そのだいいっせんを投げ、東雲しのゝめの横雲よこぐもは黄金色こんじきに染そまり、沖おきなる島山しまやまの頂いたゞきは紫嵐ししらんに包つまれ、天地てんち見るとして清新せいしんの氣きに充みたされて居ゐる時とき、濱はまは寂じやく寞ぼくとして一いつの人影じんえいなく、穩おだやかに寄よせては返かへす浪なみを弄ろうし、又弄またろうされて千鳥ちどりの群むれは岩いはより岩いはへと飛びかうて居ゐました。が、斯かかる際さいにも絶望ぜつぼうの底そこに沈しづんだ人の心ひとこころは益々ますます闇やみを求めもとて迷まよふものと見みえ、一人ひとりの若者わかものありて、蒼あをざめた顔かほを襟えりに埋うづめ、一いつの岩角いはかどに蹲うづくま居ゐつて頻しきりと吐息といきを洩もらして居ゐました。彼かれは其覺悟そのかくごを決きめながらなほ、躊躇ためらうて居ゐたのです。

人の足音あしおとに驚おどろいて後うしろを返ふりかへると一人ひとりの老人らうじんが近ちかづいて來くる處ところです。老人らうじんが傍そばに來きて、

『日が今昇るのを見なさい、何と神々しい景色ではないか』と優しく言葉をかけるまで、若者は何を思ふ暇もなく、ただ茫然と老人の顔を見て居たのです。

『見なさい今だ、今が初日出だ』と老人は言ひつゝ海原遠く眺めて居るので、若者も連られて沖を眺めました、眞紅の底に黄金色を含んだ一團球は今しも半天際を躍出でて、暫したゆたふて居る様です。

『神々しいぢやアないか、人間といふものは何時でも此初日出の光を忘れさへ爲なければ可いのぢや』と老人は感に堪えぬやうに言つて手を合して靜かに禮拜しました。若者も思はず手を合はしました。見るが中に日は波間を離れ、大空も海原も妙なる光に満ち、老人と若者は恍惚として此景色に打れて居ました。

『私は六十になるが斯な立派な日の出を見たことはない。來年はこれよりも美しい初日の出を拜みたいものだ。あゝ佳い心持ぢや』と老人は言つて更に若者に向ひ

『お前さんは何處の者ぢや』と問ひました。

『村の者で御座います。』と若者は僅に答へました。老人は其柔和な顔に微笑を浮べて

『毎年初日の出を拜みに出るのか。』

『さうでは御座いません。』

『さうか、それでは今年が初めてだの昔からも一年の謀は一元旦にありといふから、お前さんも、今日の日の出を忘れないで居なさい如何じや大變顔の色が悪いやうじやがそんな元氣のない顔色をして居ては世の中を渡れるものではない、一同に日の出を拜んだも目出度い縁じや、これから私の宅へ來るが可い、雑煮でも祝はう。』

老人は先に立て行くので若者も其儘後に従き、遂に老人の宅に行つたのです、砂山を越え、竹藪の間の薄暗き路を通ると士族屋敷に出る、老人は其屋敷の一に入りました。

老人の名は大島仁藏、若者の名は池上權藏であるといふことを言へば、諸君は、既に大概の想像はつくだらうと思ひます。

老人は若者の自殺の覺悟を最初から見取つて居たのですけれども最後まで直接にさうとは一言も言ひませんでした。

屠蘇を飲ましながら、言葉靜かに言つて聞かした教訓は決して珍らしい説ではなかつたのです。少し理窟を並べる男なら誰でも言ひ得ることなりました。朝日が波を躍出るやうな元氣を人は何時も持て居なければならぬ。

だから人は何時も暗い中から起きて日の出を拜むやうに心掛ければならぬ。

そして日の入まで、手あたり次第、何でも御座れ、其日に爲るだけの事を一心不亂に爲なければならぬ。

日は毎日、出る、人は毎日働け。さうすれば毎晩安らかに眠られる、さうすれば、

そのよく、日は又新しい日の出を拜むことが出来る。

一日働いて一日送れば、それが人の一生涯である、日の出る時に人は生れて、眠る時に人は死ぬるのである。

老人の言ひ聞かした言葉は先づ斯んなものでありました。そして權藏は奮ひ起つて老人の下を去つたのです。

池上權藏は此日から生れ更りました、元より強健な體軀を持って居て元氣も盛な男ではありましたが、放蕩に放蕩を重ねて親讓の田地は殆ど消えて無くなり、家

屋敷まで人手に渡りかけたので、遂に失望落膽し、今更ら世間へも面目なく、果は思ひ迫つて大いに決心して居たのです。けれども彼は此日から生れ更りました。

一日又一日、彼は稼ぎに稼ぎ、百姓は勿論、炭も焼ば、材木も切り出す、養蠶もやり、地木綿も織らし、凡そ農家の力で出来ることなら、何でも手當次第、そし

て一生懸命にやりました。五年目には田地も取返し、畑は以前より殖え、山懐の荒地は美事な桑園と變じ、村内でも屈指の有富な百姓と成り終せたのです。しかも彼の勞働辛苦は初と少も變らないのです。

おほしまらうじん びやうしやう  
大島老人の病床に侍して、最後の教訓を彼が求た時、老人は靜かに

『お前さんは日の出を覺えて居なさるか。』

『毎朝拜んで居ります。』

『お前さんは日の出の盛な處を見て、元氣よく働らいたのは宜しい、これからは、其美しい處を見て、美しい働をも爲るが可からう。美しい事を。』

ごんざう しばらかん  
權藏は暫く考がへて居たが、

『それでは先づ如何な事を爲せば可ろしう御座いましょう。』と問ひました。老人は目を閉ぢたまゝ

『それはお前さんが考がへなければならん、お前さんの心で、これは美しいことだと思ふこと、日の出を見てあゝ美しいと思ふと同じやうな事ならば、何でも宜しい。お前さんは日の出を拜むだらう。』

『ハイ拜みます。』

『それなら拜まれるほどのことをなさい。』

『及びもつかん事で御座ります、勿體ないことで御座ます。』と權藏は平伏しました、

『イヤそうでない、お前さんは日の出の元氣を忘れましたか。』

と言はれて權藏は、『解りました、難有う存じます』と言つたぎり、感泣して暫らくは頭を得上げませんでした。

おほしまじんぎょうをう 大島仁藏翁の死後、權藏は一時、守本尊を失つた體で、頗る鬱々で居ました

が、それも少時で、忽ち元の元氣を恢復し、のみならず、以前に増て働き出しました。

鬱々で居たのは考がへて居たのです。彼は老人の最後の教訓を暫時も忘れることが出来ないで、拜まれる程の美しい事を爲るには何を爲たら可からうと一心に考がへ

たのです。神々しき朝日に向つて祈念を凝したこともあつたのです。ふと思ひ當つた

ときには彼は思はず躍り上つて喜んださうです。『自分は 大島先生を拜んでも尚ほ足り

ない程に思ふ、それならば 大島先生 のやうなことを爲ればよい。』

其處で學校を建てる決心が彼の心に湧たのです、諸君は彼の決心の餘り露骨で、

單純なことを笑はれるかも知れませんが、しかし元來教育のない一個の百



姓やうです、寧むしろ其その心こゝろばせの眞しん率そつで無む邪じや氣きな處ところを思おもへば實じつに美うつくしさを感かんずるのです、僕ぼくは。

とかく、このけつしんさだ  
 兔も角も此決心が定まるや、彼は更に五年の間眞黒になつて働はたらきそして、遂つひに一ひとの小學校を創立して、これを大島仁藏の一子大島伸一に獻けんじ、大島小學校と命名して老先生の紀念となし一切のことを若先生伸一に任まかして了しまつたのです。以上は大島小學校の由來で御座います。けれども果はたして池上權藏の志は學校を建てたばかりで、成就じやうじゆしましたらうか。

もし大島伸一先生を得なかつたなら、此小學校も亦た、世間せけんに有ありふれた者ものと大差なく終つたかも知れません。

然し伸一先生は老先生の麗うるはしき性情せいじやうを享うけて更にこれを新しく磨みがき上げた人物として此小學校を監督かんとくし我々われわれは第二の權藏となつて教導けうたうされたのです。權藏の志は最も完全くわんぜんに成就じやうじゆされました。

忘れもしません、僕が病氣びやうきで學校を休やすんで居ると、先生が訪たづね來て『貴様あなたは豪えらい人になるのだから、決けつして病氣位びやうきぐらゐに負まけてはならん病氣びやうきを負まかしてやらなければ』と言いつて僕を勵ほげましたことがあります。伸一先生は決けつして此意味このい味みを舊きう

式しきに言いつたのではありません。

『爲なす有ある人ひととなれ』とは先生せんせいの訓言くんげんでした。人ひとは碌々ろくろくとして死ぬしべきでない、力ちからの限かぎりを盡つくして、英雄えいゆう豪傑かうけつの士しとなるを本懐ほんくわいとせよとは其倫理そのりんりでした。

人は人ひと以上いじやうの者ものになることは出来できない、然しかし人ひとは人の能のうりよく力りきの全部ぜんぶを盡つくすべき義務ぎむを持って居ゐる。此義務このぎむを盡つくせば則すなはち英雄えいゆうである、これが先生せんせいの英雄えいゆう経きやうです。

そして老先生らうせんせいが權藏ごんざうに告つげた言葉ことば、あれが其註解そのちゆうかいです、そして權藏ごんざう其人そのひとを以もつて先生せんせいは實物教育じつぶつけういくの標本へうほんとしたのです。

日ひの出でを見みるとは、大島小學校おほしませうがくかうの神聖しんせいなる警語けいごで、其堂々そのだうだうたる冲天ちゆうてんの勢いきほひと、其飽そのあくまで氣高けだかい精神せいしんと、これが此警語このけいごの意味いみです。

一日いちじつ又また一日いちにちと、全ぜん力りきよくを盡つくして働はたらく、これが其實行そのじつかうなのです。

伸しん一先生いちせんせいの柔和にうわにして毅然きぜんたる人物じんぶつは、これ等の教訓けうくんを兒童こどもの心こころに吹ふき込こむに適てきして居ゐたのです。

そして、先生せんせいも亦またた、一心いつしん不亂ふらんに此精神このせいしんを以もつて兒童じどうを導みちびき、何時いつも樂たのしみに見みえ、何時いつも其顔そのかほは希望きぼうに輝かやいて居ゐました。

小學校せうがくかう生活せいくわつの詳くはしい事ことは別べつに申まうしますまい。去年きよねんの夏なつでした、僕ぼくは久ひさぶりしで故く

郷にかへに歸かへつて見みましたが、伸しん一いち先せん生せいは年としを取とつたばかり、其その精せい神しんと其その生せい活くわつは少すこしも變かはりませせん。年としを取とつたと言いつた處ところで四し十じゅう三さんですもの、人にん間げんの働はたらき盛さかりです。精せい神しん意い氣きに變かはりある筈はずもないのです。

たゞ老おいて益ます々く其その教けう育いく事じ業ぎやうを樂たのみ、其その單たん純じゆんな質しつ素そな生せい活くわつを樂たのしんで居をらるゝのを見みては僕ぼくも今いま更まさら、崇すう高かうの念ねんに打うたれたのです。

昔むかしのまゝ練ねり壁かべは處ところ々く崩おれ落おちて、瓦かはらも完くわん全ぜんなのは見み當あたらぬ位くらゐそれに葛かづら蔓づらが這はい上のぼつて居ゐますから、一いつ見けん廢ふ寺でらの壁かべを見みるやうです。

其その壁かべを越こして、桑くわ樹のきの老らう木ぼくが繁しげり、壁かべの折をり曲まがつた角かどには幾いく百ひやく年ねん經たつた、鬱うつとして日ひ影かげを遮さへぎ居ゐる檉かし樹のきが盤わだ居かまつて居ゐます。

昔むかし風ふうの門もんを入はひ桑くわ園のきの間のまを野や路ぢのやうにして玄げん關くわんに達たつする。家いへは僅わづか四よ間ま以前いぜんの家いへを壊こして其その古ふる材ざいで建たてたものらしく家いへの形かたちを作なして居ゐるだけで、風ふう趣うちも何なにも無ないのです。

先せん生せいは其その一ひと間まを書しよ齋さいとして居をられましたが、書しよ籍せきは學がく校かう用ようの外ほか、新しん刊かん物ものが二しゆ三さん種しゆ床この上うへに置おいてあるばかりでした。

縁えん邊がはには豆まめが古ふるぼけた細ざる籠ごに入いれ干ほてある、其その横よこに怪あやしげな盆ぼん栽ざいが二は鉢ち並ならべてあ

りました。

『東京の事は如何です。新聞は毎々難有う、續々面白い議論が出来ますなア』と先生は僕の顔を見るや口を開きました。

『イヤ如何も愚論ばかりで恥かしく御座います、然しあれでも私の力一杯なのです。』  
 『それで十分です、力の限り書いて其で愚論なら別に仕方無いな。けれども樂は有ります。私はこの頃になつて益々感ずることは、人は如何な場合に居ても常に樂しい心を持って其仕事をする事が出来れば、則ち其人は眞の幸福な人といひ得ることだ。不精々々にやつた仕事に立派な仕事はない、そして一生懸命に仕事する時ほど樂いものはないやうだ。』

先生の此等の言葉は其實平凡な説ですけれど、僕は先生の生活を見て此等の説を聞くと平凡な言葉に清新な力の含んで居ることを感じました。

伸一先生は給料を月十八圓しか受取りません、それで老母と妻子、一家六人の家族を養ふて居るのです。家産といふは家屋敷ばかり、これを池上權藏の資産と比べ見ると百分一にも當らないのです。

けれども先生は其家を圍む幾畝かの空地を自から耕して菜園とし種々の野菜

を植ゑて居ます。又五六羽の鶏を飼ふて、一家で用ゆるだけの卵を採つて居ます。

書齋の前の小庭は奇麗に掃除がして有つて、其處へは鶏も入れないやうにしてあります。

先生の生活は決して英雄豪傑の風では有ません、けれども先生は眞の生活をして居のです、先生は決して村學究らしい窮屈な生活、ケチくした生活はして居ません、けれど先生は自分の虚榮心の犠牲になるやうな生活は爲て居ません。

僕は先生と對座して四方山の物語をして居ながら、熟々思ひました、世に美はしき生活があるならば、先生の生活の如きは實にそれであると、先生の言論には英雄の意氣の充て居ながら先生の生活は一見平凡極ものでした。先生を訪ふた、翌日でした、使者が手紙を持て來て今から生徒十數名を連れて遠足にゆくが君も仲間に加はらんかといふ誘引です。僕は直ぐ支度して先生の宅に駆けつけました、それが朝の六時、山野を歩き散らして歸つて來たのが夕の六時でした、先生は夏期休業と雖も常に生徒に近き、生徒の爲めに時間を送つて居らるゝのです。

諸君の中、若し僕の故郷に旅行せられるやうなことが有つたならば、是非一度大

島小學校を訪はれたいものです。海岸に近き山、山には松、柏、茂り、其頂に  
 は古城の石垣を残したる、其麓の小高き處に立つて居るのが大島小學校であ  
 ります。それが僕の出身の學校なのです、四十幾歳の屈強な體軀をした校  
 長大島氏は、四五人の教員を相手に二百餘人の生徒の教鞭を採つて居られます。  
 『日の出を見よ』といふ警語は今も昔に變りなく、恰も日の出の力と美とが今も昔も變り  
 のないやうに、全校の題目となり、目標となり、唱歌となり居るのを御覽になり  
 ましよ。

語り終つて兒玉は一呼吸吐くやオックスホードの紳士は

『なるほど能く解りました、日の出は力です、美です、そして實に又希望です、僕は貴殿  
 が大島小學校の出身であることを感謝し、誇らるゝことを、當然と思ひます。  
 僕も一度是非お國に參つて大島伸一先生にもお目にかゝりたう御座ます。』  
 『そして、僕は池上權藏に會つて見たい』など高等商業の紳士は大眞面目で言つ  
 た。

『權藏は今如何して居ますか』と問たのはハーバードである。

『さうでした、權藏のことを言ふのは忘れて居ました、益々達者に暮して居ます。』

おほしませうがくかう 大島小學校 も今は村の經濟で維持して居ますが、しかし村の經濟の首腦は池上權藏ですから、學校の保護者は依然として其の昔覺悟まできめた百姓權藏であります。

權藏の富は今や一郡第一となり、彼の手によつて色々の公共事業が行はれて居るのです。けれど諸君が若し彼に會たら恐らく意外に思はるゝだらうと思ひます。權藏は最早彼は六十です。けれども日の出づる前に起きて日の没するまで働くことは今も昔も變りません。そして大島老人が彼を救ふた時、岩の上に立つて、

『來年はこれよりも美しく初日の出を拜みたいものだ。』と言つた言葉、其言葉を堅く覺えて居て、其精神を能く味はうて、年と共に希望を新たにし、一日又一日と働いて老の至るのを少しも感じない様子です。

『老を知らなければ老いず、僕は池上權藏は死ぬるまで老ないだらうと思ひます、死ぬる今はの際にも、彼は更に一段の光明なる生命を望んで居るだらうと思ひます。不死不朽とはこのことでは御座いますまいか。』

權藏は其居間の床に大島老先生の肖像をかゝげ、其横に日の出の圖が下つて居ます。これは伸一先生に求めて畫いて貰つたださうです。そして大島小學校

の一室には池上權藏の肖像が掛けてあります。』

それより一週間ばかり経つて、兒玉進五の宅で彼の所謂同窓會が開かれた。兒玉は此席で同好俱樂部の一條を話した、他の二人は唯だ微笑したばかり、別に何とも評しなかつた。

會毎に三人は相談して必ず月に一度の贈品を大島小學校に送る、それが必ずしも立派な物ばかりではない、筆墨の類、書籍圖書の類などで、オルガン一臺を寄送したのが一番金目の物であつた。

『今度は何を送らう』と兒玉は二人に問ふた。

『矢張書籍が可からうぢやないか』と判事が答へた。

『本なら僕に考へがある。今度會社で世界航海圖の新しいのが出來たから、あれを貰つて送らう如何だね、』と郵船會社員が一案を出した。

『それも至極妙だ。けれども其他何にしよう。』

『畫は如何だらう』と判事が一案を出した。

『畫も可いが最早有りふれたものばかりだからなあ。』



『實は先日、倫敦の友人から『世界の名畫』と題して、随分巧妙に刷てあるのを二十枚ばかり贈つて呉れたがね、それは如何だらうかと思ふのだ。』

『可からう!』と他の二人は賛成した。

『其所で例の唱歌の一件だがね、僕は色々考がへたが今更唱歌にも及ぶまいと思ふのだ如何だらう。』

『日の出を見ろ』で澤山じやアないか。それをなまじつか今の歌

人に頼んで作らした所でありふれた、初日の出の歌などは感心しないぜ。若し作くる

なら學校から出た者が作つたのでなければ、とても『日の出を見ろ』の一語で我等が感

ずるやうな物は出来ないぞ、如何だらう?』と兒玉の説いたのに二人は異議なく賛成し、

兒玉は二人の前で大島校長宛にすらくと次の手紙を書いた。

『御依頼の唱歌の件は我等三人とも同意致し兼ね候。東京にも歌人の大家先

生は澤山あれど我等のやうに先生の薫陶を受け大島小學校の門に學び候もの

ならで、能く我等の精神感情を日の出の唱歌に歌ひ出し得るもの有るべきや、甚だ

覺束なく存候。我等の學校も何時かは眞の詩人出づることあらん。その時まで

は矢張り『日の出を見ろ』で十分かと存候。日の出の唱歌を歌ふて朝寐坊す

る人物が學校から出るやうになりては何の益にも立つまじく、其邊御賢慮願

上げさくらぶ  
上候。』

三人は連名で此手紙を出した、大島先生から直ぐ返事が来て  
 『御主意 尤に候。日の出の唱歌は思ひ止まり候。浅ましい哉。教室に慣れ候に  
 従かつて心よりも形を教へたく相成る傾き有之、以後も御注意願 上候。』

# 青空文庫情報

底本：「定本 國木田獨歩全集 第三卷」学習研究社

1964（昭和39）年10月30日初版発行

1978（昭和53）年3月1日増訂版発行

1984（昭和59）年1月20日第10刷発行

底本の親本：「運命」佐久良書房

1906（明治39）年3月18日発行

初出：「教育界 第二卷第三號」金港堂

1903（明治36）年1月1日発行

※「今更《いまさら》ら」と「今更《いまさら》」の混在は、底本通りです。

入力：葛西重夫

校正：川山隆

2014年12月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 日の出

国木田独歩

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>